

2022 年夏

マラヤ大学オンライン研修体験レポート
ENGLISH LANGUAGE COURSE



目次

a.	プログラムの概要.....	2
a-1.	マラヤ大学の紹介.....	2
a-2.	プログラムの概要.....	3
	期間.....	3
	参加者の出身大学.....	3
	使用したソフトウェア.....	3
	主なスケジュール.....	4
a-3.	各授業や活動の内容.....	5
	授業ごとの内容.....	5
	アクティビティの内容.....	6
b.	プログラムのハイライト.....	7
	Fashion Show (文学部 1 年 石井佐保).....	7
	Let's Sing Together! (文学部 2 年 奥田洸大).....	7
	Grammar Classes (文学部 2 年 倉田知温).....	8
	Writing and Composition (経済学部 4 年 青駿介).....	9
	Writing and Composition (経済学部 1 年 茶谷太郎).....	9
	Malaysian Studies (経済学研究科修士 1 年 馬虹伊).....	10
	映画を見て、幸せとは何かを考える (経済学研究科修士 1 年 江曉珊).....	10
	語彙は言語学習の基本 (経済学研究科修士 1 年 ZHUANG YUAN).....	11
	映画鑑賞 (工学部 2 年 石川朋佳).....	11
	魔法のように雰囲気を変えたゲーム (農学部 1 年 鹿股とほこ).....	12
	Discussion with my buddy (医学部保健学科 2 年 今井佑理花).....	12
	Virtual Trip (医学部保健学科 2 年 堀内華乃).....	13
c.	研修体験・成果.....	15
	「英語」だけではないマラヤ大学 ELC での学び (文学部 1 年 石井佐保).....	15
	笑いが作る、話しやすい雰囲気 (文学部 2 年 奥田洸大).....	16
	マラヤ大学へのオンライン留学でえたもの (文学部 2 年 倉田知温).....	17
	なくなった英語への抵抗感 (経済学部 4 年 青駿介).....	18
	今回のプログラムでの成長 (経済学部 1 年 茶谷太郎).....	19
	プログラムによる得られた成果 (経済学研究科修士 1 年 馬虹伊).....	20
	オンライン留学を通して得たもの (経済学研究科修士 1 年 江曉珊).....	20
	体験と成果 (経済学研究科修士 1 年 ZHUANG YUAN).....	21
	オンライン留学で得た気づき (工学部 2 年 石川朋佳).....	22
	プログラムを通して身についたこと (農学部 1 年 鹿股とほこ).....	23
	プログラムを通して得た発見と成果 (医学部保健学科 2 年 今井佑理花).....	24
	プログラムに参加して得たもの (医学部保健学科 2 年 堀内華乃).....	25

a. プログラムの概要

a-1. マラヤ大学の紹介

国立マラヤ大学は、首都クアラルンプール南西に位置する、マレーシア最古の大学である。マレーシア最高峰の大学として知られており、QS World Rankings 2023 では、70 位にランクインし、世界的評価も高い（東北大学は79位）。世界に影響を与えるグローバル大学というビジョンと知識の限界に挑戦し、リーダーを目指す人を育成するというミッションを掲げており、交換留学等にも積極的に取り組んでいる。また、広大なキャンパスには、講堂や図書館、留学生寮やスポーツ施設が充実しており、学内の移動にはシャトルバスが運行している。クアラルンプール中心部からのアクセスが良いにも拘らず、キャンパス内には植物園や池があり、都市と自然の調和のとれたキャンパスが特徴的である。また、人文・社会学部、建築環境部、ビジネス・経済学部、コンピューター科学・情報科学部、歯学部、教育学部、工学部、言語学部法学部、医学部、科学部等、様々な専攻を選ぶことができる総合大学である。マレーシアにはマレー系、中華系、インド系、と多様な民族が共生しており、マレー語、中国語、タミル語が話されているのはもちろん、教育や社会の共通言語として英語が広く普及している。人々が信仰する宗教もイスラム教、仏教、ヒンドゥー教、キリスト教など多岐に渡る。マラヤ大学には、このような異なる民族・言語・宗教の人々が集まっている。それぞれが高い志をもち、互いに尊重し合いながら切磋琢磨できる環境が整っているところがマラヤ大学の魅力のひとつである。

a-2. プログラムの概要

- 期間

2022年8月15日～2022年9月2日の3週間

*2022年8月12日 オリエンテーション

- 参加者の出身大学

University of Malaya

東北大学

岡山大学

関西学院大学

- 参加学生数

University of Malaya 9人

東北大学 12人

岡山大学 6人

関西学院大学 4人

日本人学生2人に対し1人のマレーシア人学生がバディとしてつき、授業の課題やアクティビティをともに行う。授業時間外にもLINE等で連絡を取り、課題の確認や交流をすることができる。

- 使用したソフトウェア

Kahoot!

Zoom

LINE

Instagram

Skribbl.io

● 主なスケジュール

授業は平日に行われ、1時限目が日本時間で10時～12時、30分の休憩を挟んで、2時限目が12時30分～14時30分である。授業によっては途中で休憩時間が設けられるものがある。時間割は表に示す通りである。Malaysian Studies は週に1回、Speaking and Pronunciation、Grammar Usage、Reading and Vocabulary、Writing and Composition の4科目が時間割に添って開講される。授業専用のLINEグループが作られる科目もあり、授業資料や課題が共有される。

アクティビティは、基本的に授業後または土日に週3回、2時間程度開催される。これらはマラヤ大学の学生が企画するものである。

以上の活動がない時間は、各自のバディと日程を調整してZoom等でミーティングを開き、バディと共同で行う課題に取り組むことがある。また、LINE等のSNSを通してバディと連絡を取り、授業や課題の相談をしたり、趣味の話やバディの話、お互いの文化の紹介をしたりして交流することができる。

表：プログラム1週目の時間割（マレーシア時間）

Day /Time	8.00 – 9.00	9.00 – 11.00	11.00 – 11.30	11.30 – 1.30	1.30 – 2.30	2.30 – 4.30	4.30 – 5.00
Monday 15 August 2022	Break	Malaysian Studies	Break	Speaking and Pronunciation	Break	Activities with i-Smart Buddies	
Tuesday 16 August 2022		Grammar Usage		Reading and Vocabulary			
Wednesday 17 August 2022		Speaking and Pronunciation		Writing and Composition			
Thursday 18 August 2022		Reading and Vocabulary		Grammar Usage			
Friday 19 August 2022		Writing and Composition		Speaking and Pronunciation			
Saturday 20 August 2022	Virtual Trip						
Sunday 21 August 2022	Virtual Trip						

a-3. 授業及び授業外アクティビティの概要

- 授業の概要

- **Malaysian Studies**

講師：Ms. Sofiya

この授業では、マレーシアの文化や歴史や宗教について学んだ。第1回の内容はマレーシアの基本情報と歴史である。例えば、マレーシアの連邦憲法、首相、地図、独立記念日、行政の中心地、基本的な挨拶などを含む。第2回では、マレーシアの人種、宗教、祭りなどについて学んだ。第3回では、マレーシアの伝統的な衣服、ゲーム、工芸について学んだ。第4回では、マレー系、中国系、インド系それぞれの結婚式や文化について学んだ。最終回の授業後、内容の理解度を確認するテストが実施された。

- **Grammar Usage**

講師：Mr. Hashim

この授業では過去、現在、未来と完了形や進行形などの定義と用法について学んだ。授業内で先生に指名され、練習問題を口頭で一人一人問題に答えることで各場面における適切な時制とその使い方を学ぶことができた。授業時間外にも個人で取り組む課題が出され、さらに理解が深まった。最終回の授業後には内容の理解度を確認するテストが実施された。

- **Writing and Composition**

講師：Mr. Shaiful

この授業では論理的な英作文の書き方を学んだ。自分の主張をパラグラフごとに目的を持って論理的に書く練習をした。また図や表から読み取れることを英作文にする課題にも取り組んだ。この際もパラグラフを意識することを学んだ。授業の中では、パラグラフを一つずつ書いていき、生徒一人一人が自分の作文を紹介し、先生がその文を添削しながら進んでいった。どのパラグラフに何を書けばいいのか、パラグラフをどのように組み立てればいいのかを学んだ。

- **Speaking and Pronunciation**

講師：Ms. Amira

この授業では、「幸福」「食べ物」「旅」などその日扱う話題について全体で意見を交わし、

その後 4 人程度でディスカッションを行った。第 3 回の授業では、ディベートの方法を学んで実践したり、グループ毎に行ってみたい国を決め、旅行日程や訪問地を計画したりする授業が行われ、自分の意見を英語で表現する力を鍛えることができた。課題としては、バディとのディスカッションや英語の早口言葉を練習した成果を録画して提出した。

・ Reading and Vocabulary

講師：Ms. Mahi

語彙に関する授業は、類義語や対義語を多く学び、それらを覚えてゲーム形式で確認して身につけるといった内容であった。文章読解の授業では、5 人程のグループ毎やクラス全体で提示された文章を読み、その後問題に答えたり、文章から馴染みのない単語や熟語をピックアップしたりして、その語の意味や例文を学んだ。最終回の授業では、授業内で学んだ語句や文章についての確認テストが Google form で行われた。

● 授業外アクティビティの概要

平日のうち週 3 回ほど授業外のアクティビティが行われる。アクティビティは授業後の 15:30~17:30 頃に行われることが多い。内容としては、ジェスチャーゲームやクイズ大会などのレクリエーション、日本とマレーシアの食べ物や民族衣装を互いに紹介しあう企画、映画鑑賞など様々なアクティビティが用意された。どれもローカルバディと楽しみながら一緒に参加できる企画である。また、一部の企画は土曜に行われたこともあり、アクティビティに参加できるよう、ローカルバディから事前に配布されるスケジュールをチェックするとよいだろう。

・ Interaction with Buddy/Whisper Game

プログラム初日の授業後、ローカルバディとの最初の交流があり、好きな食べ物や最近の趣味など、基本的な事項を知り、互いに対する理解を深めた。また、声を出さずに何の英単語を発音しているかというゲームも行い、盛り上がった。

・ Closing Ceremony

閉会式では先生方のありがたいお言葉を賜った後、プログラムの参加者とローカルバディがプログラムを通しての感想とそれぞれのバディに対しての感想を伝えあった。参加者やローカルバディの中には感極まっている人も多く、プログラムの密度の濃さを感じた。その後英語の歌を一緒に歌い、最後の時間を過ごした。

b. プログラムのハイライト

Fashion Show

文学部 1 年 石井佐保

今回のプログラムで私にとって最も印象に残っているのは、アクティビティの時間に行ったマレーシアの現地バディと日本人学生の「ファッションショー」だ。具体的にはお互いの伝統的な衣装を紹介し合った。

何人かの日本人学生が実際に甚平や浴衣を着てオンライン上で現地バディに見せ、紹介した。私は浴衣を着ていたのだから何とか英語で説明しようと試みたが、一般的な着物との違いなどを説明することはとても難しかった。しかし、ローカルバディは私のおぼつかない英語に対して、何度も「Cute!!」「So cool!!!」などと大きなアクションをしてくれた。話す前は伝わるかどうか不安が大きく、実際に話したかったことがすべて伝わったわけではないと思うが、ローカルバディのリアクションのおかげで私も楽しむことができた。

特に興味深かったのがマレーシアの伝統衣装の紹介だ。マレーシアでは数多くの宗教が信仰されており、それぞれ異なる文化や風習を持つ。ローカルバディにもイスラム教徒の学生をはじめ、様々な信仰やルーツを持つ学生がいて、それぞれの紹介する同じ国とは思えないほどの多種多様な伝統衣装に心躍った。特に、日本では馴染みの薄いイスラム系の衣装では、衣装の細部ひとつひとつに宗教的な要素があるなど、自分の知らない「世界」を新たに学ぶことはとても面白く興味深い体験だった。

Let's Sing Together!

文学部 2 年 奥田洸大

プログラム最終週の土曜日に、私たち参加者は閉会式を行った後にアクティビティとしてローカルバディと一緒に歌った。プログラムで友情を深めた私たちにとって、一緒に歌うことは共に楽しむうってつけの機会のように思われる。しかしながら、私のこれまでの経験では、Zoom 上となると、それは途端にうまくいかなることが多かった。参加者がラグによって音ずれがおきることや声をあげることに羞恥心を感じ、ミュートに設定してしまうのだ。したがってほとんどの参加者はただ歌を聴いているか、画面の向こうで一人歌っているだけとなる。今回も、ローカルバディのみが歌いあまり盛り上がらないのではと思っていた。

だが、私の心配は杞憂に終わる。One Direction の『Live While We're Young』が流れて

いるとき、ローカルバディだけでなくプログラム参加者も含めたみんなが声を出し、歌っていたのだ。確かに、Zoom を通したオンライン上では参加者はみな物理的に離れた場所にいる。ましてやマラヤ大学のローカルバディはマレーシアにいるのだ。だが、皆で声を出して歌えば、心は一つになる。最後の別れを惜しみながら、自然と声が溢れてくるのだ。

もし海外の人とも心を通わせたいのなら、どうすべきか。答えは歌を歌うことである。例えば歌詞の意味がよく分からなくてもよい。ともに歌うことによって、自然と一体となっていくのだ。さあ、Let's sing together!

Grammar Classes

文学部 2 年 倉田知温

私にとって最も印象深かったのは Grammar Classes である。この授業では、現在時制、過去時制、未来表現をはじめとする 12 の時制表現について、定義や使い方を教わった後に多くの問題を解いて練習した。この授業が印象に残った理由は、詳細に各時制の区別を学べたことと、授業中に問題演習へのフィードバックを多く受けられたことの 2 点である。

まず、各時制の使い分けの基準に関して、具体的な例文や状況も交えながら説明を受けたり、演習問題を多く解いたりすることで理解が深まった。中学・高校や予備校での授業でも同様の解説はあったものの、限られた時間で簡単に触れる程度であった。市販の文法の問題集にも時制の使い分けに関する問題はあったものの、問題数が少なく、解説も簡素であった。そのため、これまで腑に落ちないことが多かったが、今回の詳細な解説により、根拠に基づいて使うべき時制を判断したり、間違えたときに何故間違えたか納得したりできるようになった。

また、問題演習に対するフィードバックも丁寧であり、わかりやすかった。中学や高校の参考書の解説は、先述のとおり総じてシンプルであり、特に誤答がなぜ誤りなのかが書かれていないことが多いため、納得できないままになってしまうことが多かった。しかし、この授業では、正答がなぜ正答なのかと、誤答がなぜ誤答なのかを定義を踏まえながら解説してくれたため、理解を深めながら問題を解き進めることができた。

これらの理由により、時制の判断能力を大きく伸ばすことができた。英語系の専修に属していることもあり、今後英語でエッセイや論文を書く機会が増えると思われるため、今回の経験を生かして、より正確な文章を書けるように努めていきたい。

Writing and Composition Class

経済学部 4 年 青駿介

Writing and Composition Class では英語でのエッセイの書き方を学んだ。エッセイの全体構成とエッセイを構成するパラグラフの書き方を、実際に手を動かしながら教わった。流れとしては、まず講師からパラグラフの書き方などのレクチャーを受け、その授業で取り扱った部分を、それぞれが選択したテーマについて各々実際に書きあげる。そして何人かがそれを発表して講師が添削をするというものだった。

私はこの授業はとても有意義なものだったと感じている。この授業ではパラグラフ内の文章構成といった細かいところまで丁寧に教わることができたうえ、実際に学んだことを使って文章を書く機会も合わせて提供されていたからだ。そのおかげで、フォーマットが決まっており、日本と異なることの多い英語でのエッセイを良く理解できたうえ、ある程度のクオリティで書き上げられるようになったと感じている。実際、授業毎に少しずつ書いていたエッセイが完成した時、通して読み返してみると我ながらよく書けているなど感心した上、バディにも良く書けていると言ってもらえることができとても嬉しかったのを覚えている。

Writing and Composition

経済学部 1 年 茶谷太郎

Writing and Composition のクラスは、私にとって有意義なものであった。授業の内容は、文章全体の構造を意識したライティングの方法である。マラヤ大学の教員からパラグラフの順番や文の並びなどについて説明を受け、与えられたテーマに基づいて実際に英語で文章を書いた。

ライティングの手法について学ぶ機会は大学入試や英語試験などで事欠かない。したがって、授業の内容も全く見聞きしたことがないものではないはずであった。しかし、このクラスほどライティングの手法について詳しく丁寧に学べる機会はこれまでになかった。特に、授業の前半では自分の意見を書く際の文の書き方を学んだ。序論では話題を提示する。本論は意見を支持する段落(Supporting idea)が二つ、対立意見(Opposing idea)の段落が一つで、それぞれがトピックと要旨、具体例からなる。そして最後に結論を提示する。このように部分ごとに書き方まで示されたことで、このようなタイプの英作文に対して今では自信を持って取り組むことができる。

Malaysian Studies

経済学研究科修士1年 馬虹伊

このプログラムで私が最も印象に残っている授業は、Malaysian Studies である。マレーシアは、マレー系、インド系、中国系など多様な民族が暮らしている国で、それぞれに異なる文化や特色を持っている。私は留学生として異文化に興味がある。週1回の Malaysian Studies では、マレーシアの様々な文化的側面を学ぶことができ、自分の視野を広げることにつながった。

この授業で、自分のこれまでの知識に加えて、更にマレーシアの文化など多くの話題について勉強できた。例えば、マレーシアの連邦憲法、首相、地図、独立記念日、行政の中心地などのような基本情報と歴史を学んだ。そして、基本的な挨拶、マレーシアの人種、宗教、祭りなども学んだ。さらに、民族の文化によって、伝統的な結婚式も異なる。マレー系、インド系、中国系の結婚式の違いを認識し、文化の理解を深めた。また、伝統的な衣服、ゲーム、工芸品、観光地などの紹介を通じて、マレーシアの魅力を感じた。この授業を通して、言語、文化、人種、宗教、歴史による多様な価値観を認識し、マレーシア、日本、中国の文化との違いを理解し、異文化への適応力を高めることができた。今後、自分と異なる国の人とコミュニケーションする時、相手の文化的背景を尊重し、積極的に話題を展開できるように努めていきたい。

映画を見て、幸せとは何かを考える

経済学研究科修士1年 江曉珊

私がこのプログラムで最も印象に残っていることは、授業後に一緒に映画を見るというアクティビティである。映画の名前は「カールじいさんの空飛ぶ家」である。この映画を通して幸せとは何かということを話し合うために鑑賞した。また、この経験を通して、みんなで映画を見るということがどういうことなのか、初めて知ることができた。

一番感動したのは、映画の後にみんなで「幸せとは何か」を話し合った時である。マラヤ大学の学生は「おばあちゃんの笑顔」、日本の学生は「家族と過ごす時間」と答えた。そして自分の経験について考えてみると、私が幸せを感じた瞬間は、「前期に自分の努力で満点のA判定を取り、両親に話したら自分のことのように喜んでくれた瞬間」であった。

国が違っても幸せの捉え方は同じで、みんなの幸せは身近な人と関係していることがわかった。映画の中でも、妻の夢を実現するために、ケヴィン(巨大な鳥)とラッセル(少年)の協力とたゆまぬ努力で、ついにカールじいさんが自分で実現する力を手に入れたのだから、幸せや愛には国境がなく、全世界共通なのだと思う。また、映画の中で見せてくれ

冒険心は貴重であり、何かにこだわりをもって集中できることは幸せなことである。目標に向かって果敢に挑戦し、夢と感動を羽ばたかせることもまた、人類共通の感動なのかもしれない。

語彙は言語学習の基本

経済学研究科修士 1 年 ZHUANG YUAN

授業の 1 つに、Reading and Vocabulary があった。どんな言語でも、その言語を学ぶ基本は語彙の習得である。英語学習において、幅広い語彙を意識することは、言語能力を向上させるための基礎となる。初心者の場合、文法の正確さよりも語彙の方が重要である。語彙力は英語学習の効果を左右する最も重要な要素といっても過言ではない。そのため、この授業は私にとって最も有益で印象的であった。

私たちは短い文章を読み、知らない単語を確認し、その意味を調べた。この方法は、新しい語を覚えるだけでなく、英語の読解力を向上させることができると思う。また、類義語と対義語も学んだ。これらの難しい語彙は、初めて見る人にとってなかなか覚えられないものだったが、講師が語彙推測ゲームを使って、語の記憶を深めてくれた。皆とても熱心に、積極的にゲームをして、Zoom はとても盛り上がった。さらに、授業内で歌を数曲聴いた。どれも講師が紹介する素敵な曲であり、授業では歌詞にある知らない語の意味を教えてくれた。それ以外に、文の文脈から語彙の意味を推測した。

たった 3 週間で覚えた新しい語は限られているが、講師の教え方により、語の覚え方について多くのヒントを得ることができた。プログラムが終わった後も、リーディングや歌を聴くなどの方法で語彙を増やしていきたい。

映画鑑賞

工学部 2 年 石川朋佳

Speaking class の課題として出された映画鑑賞は、「UP」、日本語版「カールじいさんの空飛ぶ家」をみて感想を共有するというものだった。映画もちろん英語であり、感想を述べるのも英語、この課題は 1 週目に出されたもので、今考えてもなかなかハードなものだったと思う。そもそも英語字幕で映画を鑑賞することが初めてだったところもあり、感想以前に映画の内容を理解できるのか、そこから心配だった。

2 限目の授業が終わり、いよいよアクティビティの時間を使って映画の鑑賞が始まる、そんな時だった。マラヤ大学の学生から LINE で映画チケットのプレゼントと「ポップコーンの準備はできた？」とのメッセージがきていた。そっか、これから映画を見るのか。楽しい

はずのことが英語になるだけで自分の中で根詰めて行わないといけないもの、という認識になっていたことに気づいた。みんなと一緒に映画をみるのだ、そしてその感想を語り合うだけ。いつも楽しくやっていること！そう思った瞬間、言語の違いは全く気にならなくなった。「UP」はとても感動的で、それぞれの大切なものを見つける旅に涙した。感想を共有する時も思ったことを思ったまま話したただけだ。英語というツールを使っただけ。1週目のこの活動を通して、英語を話すこととはどういうことなのか、自分のなかで答えが出た気がした。

魔法のように雰囲気を変えたゲーム

農学部1年 鹿股とほこ

このプログラムの中で私が最も印象に残っていることは、週3回のアクティビティである。アクティビティは、英語を用いて我々日本の大学に通う学生とマレーシアの学生の仲を深めようという目的のもと行われたものだ。その中でも最初に行われた英語を使ったゲームから学ぶことが多かったため、このアクティビティを紹介したい。

最初は慣れないオンラインでの交流に馴染めず、英語を聞き取ったり、話したりすることにも大きな壁を感じていた。その中で行われた最初のアクティビティが人狼と数数えゲームであった。人狼は英語で werewolf と呼ばれ、日本で行われるゲームの内容と同様で、その内容を英語で行うというものであった。1人ひとりに役職が与えられると、会話が始まる。しかし、ほとんどの会話は「Are you a wolf?」や「No!」で成立してしまうのである。そのため、英語を話すことのハードルが低く、それまで以上に多くの人が口を開くことができた。2つ目の数数えゲームは、リズムに乗って「1」「2」「3」…と自分の好きなタイミングで声を上げ、誰かと被ったら負けというゲームである。こちらも数字を英語で言うだけであるので、英語で話すハードルが低く全員が参加しやすい雰囲気ができた。

これらのゲームを通して、オンラインでも、英語で話しやすい雰囲気ができ、その後のアクティビティや授業も英語での会話に対応することができた。このような効果が表れた理由を2つ推測した。1つ目は、英語を使うハードルが低いことである。2つ目は、勝ち負けがあるため、積極的に参加しやすいことである。このことから、ゲームが英語での交流に役立つことが分かった。

Discussion with My Buddy

医学部保健学科2年 今井佑理花

Speaking and Pronunciation の授業ではバディとのディスカッションが毎行われ、提示

されたトピックに関して Zoom のブレイクアウトルームを用いてバディと意見交換をした。私が強く印象に残っているのは「happiness」と「pet peeves」の2つのトピックでのディスカッションである。

1つ目の「happiness」についての授業では、授業外課題として映画「カールじいさんの空飛ぶ家」を見て、登場人物にとっての幸せや、この映画を見て自分の幸せの概念が変化したかどうかについて話し合った。実際に私のグループでは、3人中3人が変化したと答えていた。他の授業やアクティビティではそれぞれの国の文化やその違いについて学ぶことが多かったが、「幸せ」というトピックのもとでは、個人の価値観や共通認識について英語を用いて話し合うことができたため、とても貴重で有意義な時間となった。

次に「pet peeves」というトピックでのディスカッションについてである。pet peevesとは周囲の人を怒らせたり不快にさせたりする行動のことである。例えば、電車やバスの中で大きな声で会話をすることや、車に非常に近い距離で自転車を走らせる行為などだ。授業では pet peeves の沢山の例を学んだあと、例の中で特に不快に思うものはどれかについてバディと意見を交換したり、課題ではバディと話し合っ て pet peeves Top 10 を決めたりした。このテーマでディスカッションを行うと、それぞれの文化の共通点や少し異なると感じる点を知ることができた。今までにない視点から文化を学ぶことができ、とても興味深い内容であった。

最後に、Speaking and Pronunciation の授業で行われたディスカッションを通して、自分の意見を英語で伝えるための積極的な姿勢を持つことの大切さを学んだ。授業では、マラヤ大学の学生がとても積極的に堂々と発言しており、私はその様子にとっても刺激を受けた。文法や単語に自信がなくても、まずは話してみなければ始まらないということに改めて気付かされ、また英語でディスカッションすることの楽しさも知ることができた。

Virtual Trip

医学部保健学科 2年 堀内華乃

今回のプログラムでは、授業外アクティビティのひとつとして「Virtual Trip」を行った。これは、マラヤ大学、岡山大学、東北大学の学生がそれぞれの出身地を動画や写真を用いて紹介するというものである。マラヤ大学の学生からは、有名な観光地や、現地の人だからこそ知る場所や食べ物を紹介してもらった。インターネットで調べるだけでは、見つけられないようなことを数多く知ることができた。Virtual Trip 後には、マレーシアに行きたいという思いも強くなった。オンライン上でもとても楽しいのだから、実際に行くことができたらどれほど楽しいのだろうと希望が膨らんだ。Virtual Trip を通して、現地の人々の言葉で魅力を知ることの重要性を感じ、世界への興味はこのような部分から広がっていくのだということを実感することができた。

また、新たな発見もあった。プログラム開始前は、マレーシアは発展途上国であるという知識はあったが、実際にどのように生活しているのか想像はできなかった。しかし、Virtual Trip を含む 3 週間を通して、日本より発展しているのではないかと感じる場面も多く見受けられた。このプログラムを通して、発展途上国のイメージも大きく変化したのである。さらに、日本について紹介したときも、マラヤ大学の学生は興味を示してくれた。日本の景色をみて「美しい」「行ってみたい」と話していた。美しいと感じるものや美味しそうと思うものは、住んでいる国は異なっても共通なのだと感じることができた。このように、Virtual Trip は互いの国への理解を深めることに繋がった。

c. 研修体験・成果

「英語」だけではないマラヤ大学 ELC での学び

文学部 1 年 石井佐保

私は今回のプログラムを通じて数多くのことを経験し、学んだ。この学びについて 4 つの視点に分けて記述したいと思う。

まず、第一に、当然ながら、英語力の向上だ。今回のプログラムを通して私は英語 4 技能と呼ばれるすべての能力に関して、受講前よりも向上させることができたと思う。特にスピーキング能力については、以前よりもずっと自分の言いたいことや考えていることを英語で話す、さらには英語で考えて言葉に出すということができるようになったと実感している。

第二に、異文化理解力の向上だ。私は大学のユニバーシティハウスで留学生と暮らしていることもあって、異文化については他人よりも深く理解していると考えていた。しかし今回のプログラムを通して、私は異文化を「理解している」というよりは「知っている」だけだったことに気付いた。つまり、知識として相手の国の文化や慣習を知っていても、その知識が相手のアイデンティティの理解に結びつかなければ意味がないということが分かった。今回、プログラムのはじめにマレーシアの現地バディの発言や行動について理解できない点はいくつかあった。しかし時が経つにつれ、マレーシアの文化に関連するものだとわかってきた。私はマレーシアについてあらかじめ知っていることがいくつかあったが、それを本当の意味で理解はできていなかったのだと思う。今後、異なる背景を持つ人と接する際に大いに役に立つ気づきを得られたと思う。

第三に、行動力についてだ。このプログラムを通して、私は失敗を恐れずにまず英語での発言にトライしてみるという行動ができるようになった。以前までの私なら他人からの目を気にして絶対にできなかったことだ。プログラム開始直後は、以前と同様、あまり発言することに前向きにはなれなかった。しかし、授業をする先生方やローカルバディに促されるままに発言していくうちに、明らかに躓いていたり間違っていたりしても誰も笑うことなく、むしろ私の英語を聞こうと意識して耳を傾けてくれていることが伝わってきた。それはマレーシア人の先生方やバディたちだけではなく、同じ受講生の日本人学生たちにしても同じだった。このことが分かってからは積極的に発言できるようになった。

最後に、感情表現についてだ。日本人学生に比べてローカルバディたちは、私から見れば少し大げさに見えるくらいの感情表現をしていた。英語に不慣れな私たちを励ます意図ももちろんあったとは思いますが、1 つひとつの発言や行動に対して「Love you♡♡♡」「So cute!!!」とポジティブな言葉を多数向けてくれた。これらはもちろん私にとって不快なものではな

く、むしろ自分の言動に対して肯定感を与えてくれる非常に嬉しいものだった。このようなローカルバディたちの感情表現に触れたことは、私も相手に感謝や親愛をできる限り大きく伝えてみたいと思うきっかけになった。

今回のプログラムを通して私が学んだことは、ひとりで英語を勉強しているような環境では決して得られなかったことばかりだ。特に現地バディたちとの交流の存在はとても大きい。今回のプログラムで学んだことを活かして、これからも自分の英語力向上を図り、さらには留学生をはじめとする外国人との交流に役立てていきたい。

笑いが作る、話しやすい雰囲気

文学部 2年 奥田洸大

日本の学生とマラヤ大学の学生の最大の違いは、授業においても授業後のアクティビティにおいても常に楽しんでいることだ。両者はともに英語の非ネイティブスピーカーであるにも関わらず、マラヤ大学の学生は和気あいあいと話し、笑顔を見せる。そこには、いったいどんな要因があるのだろうか。

プログラム中にマラヤ大学の学生たちは常に楽しそうに話していた。プログラムでは Zoom を使っていたのだが、そのチャット欄でも彼らは交流する。特に、ある学生は授業後のアクティビティにおいて、いつも面白いジョークを放っており、私を大いに刺激した。私もジョークを言ってみたくなったのだ。そして、機会は訪れた。プログラム参加者とローカルバディが互いに自国の観光地などを紹介するアクティビティがあり、ある参加者が故宮を紹介した。故宮は明・清王朝の皇宮であり、あまりにも大きいためすべてを見るには最低でも一日以上かかるそうだ。あるローカルバディは「It takes 1 day for me to see all」とチャットに打った。別のローカルバディは「It takes 1 week for me to see all」と打った。ここで、私はジョークを思いつき、次のように打った。「It takes 1 year for me to see all」と。私は方向音痴なので、本当にそれくらいかかるかもしれない。幸いなことに、ローカルバディたちが笑みを浮かべていたようだった。笑いは万国共通である。

この後も、私は徹底的にジョークを言うようになった。授業や授業後のアクティビティにおいても皆を笑わせようとボケたし、チャットにもジョークをたくさん書いた。結果として、英語の運用能力は向上し、またジョークをどんどん言おうとしたことで自身の行動力にもさらに磨きがかかった。私がこのような行動ができたのは、マラヤ大学の学生たちの作り出す良い雰囲気に感化されたからであり、ある意味で文化適応の一例であるかもしれない。

日本語に限らず、英語を話すときも、話しやすい雰囲気は私たちをより積極的にする。そして、このプログラムでマラヤ大学の学生たちがまさに雰囲気作りを行っていたことを学ぶことができた。今度は私の番である。私はこれから日本の学生や留学生と交流するときに積極的にジョークを言い、話しやすい雰囲気を率先して形成することで、互いに親睦を深め

ることに積極的に貢献していきたい。

マラヤ大学へのオンライン留学で得たもの

文学部 2年 倉田知温

私はこのプログラムを通じて、素早く意味の伝わる文を英語で話す能力と日本の文化を学習することの重要性、積極的に質問することの重要性に気づいた。

まず、英語の発話というと、中学や高校、大学では事前に準備した内容をスピーチすることが多かったが、今回のプログラムでは、それだけでなく、*impromptu speech* や日常会話などにおいて十分に準備できていない状況で話すことを求められることが多かった。事前に準備できるときは話す内容を記憶して、それをそのまま言えばよかったが、今回はその場で内容を考えなければならず、長考することも難しかった。もちろん最初は詰まりながら話したり、途中で論理が破綻してしまったりすることが多かった。しかし、徐々にこのようなプレッシャーに慣れていくにつれて緊張が解け、話す内容に集中できるようになった。それにより、直感的に話す内容の見通しが立つことや、それを英訳するときこれまで以上に覚えてきた例文を場に応じて思い出せることが増えてきた。その結果として、英語をすばやく発話できるようになった。この能力は、日常会話に生かせるのはもちろんであるが、英語で発表するときに内容を思い出せなくなったり内容について質問されたりしたときにも生かせるのではないか。今後、*impromptu speech* を友達としたり、ニュースや参考書等の音声をシャドウイングしたりすることにより、プレッシャーのかかる中で発話する機会が増え、この瞬発力をさらに鍛えられるのではないかと考えられる。

次に、*Malaysian Studies* の授業において、自分が日本の文化を知らないことが分かった。この授業では先生が人種や政治形態などの他に、マレーシアの宗教や結婚、服装などの文化について解説していた。その時に先生はしばしば「日本ではどうか」などと質問を投げかけたが、結局何も思い浮かばなかったり、思い浮かんだとしても詳細な説明ができそうになかったりしたため、一度も答えられなかった。この経験から、他文化を知ろうとすることも大切なことだが、日本文化についても勉強し、他人に説明できるようにならなければ異文化交流は成り立たないことを実感した。今後は、例えば英語で書かれた日本に関する記述を読んだり聞いたりすることで、英語力を伸ばしながらに本文化についても学んでいきたい。

最後に、今回のプログラム中、会話はすべて英語でなされたため、どうしても聞き取れない部分が多く、課題に関する部分も理解できないことが多かった。日本の大学の授業では先生が日本語で説明してくれることが多く、わからなかったとしても友達に簡単に聞くこともできたが、今回はバディに英語で LINE する必要があるため、億劫に感じることも多かった。しかし、聞けば丁寧に対応してもらえることが多く、徐々にわからないことを気軽に聞けるようになった。このことから、分からないことがあったら勇気を出して聞くことが重

要であると学んだ。

前述した瞬発力や自文化の知識や質問能力は異文化コミュニケーションに必須であると思われるため、今回のプログラムで得た考え方や知識を生かしてさらに高めていきたい。

なくなった英語への抵抗感

経済学部 4年 青駿介

このプログラムを通じて、私が何よりも成長したと感じていることは英語への抵抗感がなくなったことだ。

まずプログラム参加前の私の英語学習の状況を説明すると、一言で言うところからつきしであった。大学1、2年の頃は英語の授業があったり、少しでも自分から英語学習のプログラムに参加したりと一応英語に触れてはいた。しかし3、4年の時はひどいもので、やらなきゃやらなきゃとは思っているものの、何もやらず時間が過ぎて行った。その結果、大学受験をピークに少しずつ英語力が後退し、英語力が不足しているのはもちろん英語への抵抗感が生まれてしまっていた。英語を話すことが怖いし、英語というものを何か遠くに感じるようになってしまっていた。

そのような状況を何とかしたいという思いで今回のプログラムに参加したが、案の定はじめはそう上手くは行かなかった。オープニングセレモニーでは話している内容が分からないことばかりで、自己紹介すらまともにできなかった。自分の力不足を痛感し、もっと英語を勉強しておけばよかったという後悔と、3週間を無事に過ごせるのかという不安が募った。英語への恐怖心すら芽生えそうだった。

しかし、その不安は杞憂に終わった。これはバディのおかげの一言に尽きる。バディと話す機会はたくさんあったのだが、私分からない時は嫌そうな素振りは一切見せずに分かるまで話し、私の拙い英語を何とか理解しようとしてくれた。そのようなバディのおかげで、自分の拙い英語でも話して大丈夫なのだ、ちゃんと伝わる、コミュニケーションを取れるのだという気持ちに変わっていった。そのおかげで自分から話すことができるようになり、拙いながらも英語でコミュニケーションを取れるようになっていった。こうして英語への抵抗感がなくなっていった。これは私にとって、とても大きな変化だった。これが自分にとってプログラムで得た最大の成果だと感じている。

しかし、まだ、肝心の英語力は未熟極まりない。言っていることが少し難しくなると聞き取れず、自分が話している時の文法はぐちゃぐちゃ、ボキャブラリーなんて中学生にも負けるかもしれない。だからこそ今回のプログラムへの参加を機にこれからも英語を勉強していきたいと思う。今まで怠けていた英語学習だが、英語への抵抗がなくなった、そして自分の足りていないところが分かった今の状況なら、できる気がしている。

私はこのプログラムに参加して良かったと思っているし、将来このプログラムに参加し

てとても良かったと思えるように、これからも英語学習に取り組んでいきたい。

今回のプログラムでの成長

経済学部1年 茶谷太郎

今回のプログラムを通じて、私の英語を用いるということに対するマインドは大きく変わった。プログラムが開始するまで、私は英語に対して大きな苦手意識があった。高校では決して得意と言える科目ではなかったし、大学の英語の授業は正直に言って苦手だ。当然、英語によるコミュニケーションを上手に行える自信もなく、寧ろ自分にできるはずがないとすら思い込んでいた。

このプログラムに参加したのは自分のそのような状況を変えるきっかけにしたいとの思いだったが、ある意味自分にもプログラムにもそれほど期待はしていなかった。現地に行くわけでもないし、期間もそれほど長いわけではないのがその理由だ。しかし、プログラムを終えた今、その考えは誤りだったと実感する。

このプログラムを通じて変化したマインドとは、英語によるコミュニケーションは、慣れの要素が強いのではないかと考えるようになったことだ。ここでいうコミュニケーションとは、技能でいえばスピーキングとリスニングである。今思えば、プログラム開始前の私は、正しい英語を話す事に拘りすぎていたのだと思う。正しい英語を話そうと頭の中であれこれと考えてしまうことが、すぐに返答できずに居心地の悪い間を生み出してしまうことに繋がっていたのだ。しかし、プログラムを通して私の考えは大きく変わった。日常的に英語を話す人であっても話す事すべてが文法的に正しいわけではないし、こちらも完璧に正しい英語を話さなくとも会話をすることはできるのだ。寧ろ難しい言葉を使おうとして悩まずに、簡単な言葉で素早く返答することが円滑なコミュニケーションに繋がるのではないかと思うようになった。そしてそれは、英語による会話続けることで自然とできるようになっていくものなのだ。

もちろんそれは、献身的なマラヤ大学の教員陣やマラヤ大学の学生の支えがあったからだろうし、正しい英語を話そうとすることを諦める理由にはならない。だが、私にとって非常に大きな気づきであったことは確かである。

プログラムによって得られた成果

経済学研究科修士1年 馬虹伊

今回のマラヤ大学のプログラムでは、英語のリスニング、スピーキング、リーディング、ライティングという4技能を体系的に学ぶだけでなく、マレーシアの様々な文化的側面も多く学んだ。また、授業後のアクティビティも豊富で、マラヤ大学の学生と一緒にゲームをしたり、文化交流をしたりした。以下では、言語運用能力、異文化適応能力、行動力という3つの点から研修成果を述べる。

まず、言語運用能力については、マラヤ大学や日本人の学生たちと会話を通して、英語での会話能力が高まった。具体的には、話す相手のことを考え、自分の意見を分かりやすく英語で伝えられるようになった。また、会話が進む中で内容が分からない時に、積極的に相手に聞き返すことができるようになった。さらに、Speaking and Pronunciationの授業では、英語でよく使われる表現や言い回しを多く学び、話す勇気も持つことができ、大きく成長できた。

次に、異文化適応能力については、自分のこれまでの知識に基づいて、マレーシアの文化など多くの話題について更に勉強できた。言語、文化、国籍、人種、性別、宗教による多様な価値観があることを認識し、マレーシアと日本と中国の文化の違いを認識した。自分と異なる国の人とコミュニケーションをする時、相手の文化的背景を尊重し、積極的に話題を展開できた。

最後に、行動力については、グループディスカッションを通して、自分から英語で話しかけたり、質問したりすることができるようになった。特にグループで課題を行う際には、多くの人から意見を聞いたり、議論したりして、自ら進んで話題を提示し、情報を得るために会話を展開できた。また、スピーキングの授業で、ディベートを2回行い、自分の意見を論理的に、自信を持って述べるようになった。

今後、このプログラムで得られた成果を活かし、さらに英語力を向上させるために頑張りたい。

オンライン留学を通して得たもの

経済学研究科修士1年 江曉珊

新型コロナウイルスの流行により留学プログラムがオンラインで実施されたが、留学の経験には全く影響がなく、このマラヤ大学で学んだすべての瞬間が忘れられないものになった。先生によって研究への取り組み方は異なり、学生にもたらす教育も異なる。しかし、全ての教員がしっかりとした土台の上に、独自の研究視点を打ち出していた。

授業はとても充実しており、先生も学生と積極的に交流した。私たちは留学生であったが、教員は現地の学生と同じように接し、授業ではいつも楽しく話をしてくれた。英語スピーチの授業で、私が能動的に話したのは計 5 回である。授業では特にスピーキング練習の分野で多くの知識を得ることができた。

マラヤ大学では英語がよく使われ、地元の学生と外国人学生を区別しない素晴らしい先生がたくさんいた。また、現地の学生もグループワークを積極的に手伝ってくれて、とても助かった。プログラムの期間、不快な思いをすることなく、彼らの文化や人々に触れ合うことができた。プログラムが終わる頃には、これからも外国の文化について意見交換をしたり、皆と同じ問題について話し合ったりしたいと思った。彼らの優れた側面をたくさん発見することができ、グループで一緒に宿題をするのが最も楽しい時間であった。特に印象に残っているのは、グループでビデオを作ったときのことである。彼らは本当たくさんのアイデアを持っていて、私はまだまだ足りないと感じた。

もちろん、教える目的や方法が違えば、光るものも違う。海外で学ぶことは、自分自身を発見し、原点に戻るようなもので、先生はガイドのように、できるだけ多くのことを説明し、中国の大学ではなかなか学べないような、わかりやすく深い思考を身につけさせてくれた。そして、課題は、チームワークと各自の自立した実践力がより試されるものとなっていた。また、Malaysian Studies の授業では、私たちとマレーシアとのギャップを実感することができた。この留学生活の経験から、自分の専攻に関する知識に精通するだけでなく、他のスキルも学んで自分を豊かにしたい、常に学び続けることでしか自分の価値に気づけないという向上心を持つようになった。

このプログラムでは、新しいことを学び、新しい友人を作るだけでなく、世界中の異なる文化の交わりを感じることができた。この点で、留学生は学ぶだけでなく、文化交流のメッセンジャーとしての役割も担っているといえる。私たちが海外の大学で留学する際には、文化的な自信をつけ、中国の声を広め、中国の物語を伝え、中国文化を世界の舞台で輝かせなければならない。また、世界中の学生とつながり、多様な価値観をもつ人々との協力を推進し、調和のとれた美しい地球規模の家庭を築き、「一つの世界」の真の意味を実現する必要がある。

体験と成果

経済学研究科修士 1 年 ZHUANG YUAN

今回のプログラムは、私が人生で初めて参加したオンライン研修プログラムだった。オンラインなので、実際に大学を訪れ直接マレーシアの友人と交流することはできなかった。プログラム開始前は、授業は少しつまらないと想像していたが、実際はとても面白くて印象深いものであった。

オンラインとはいえ、マレーシアの伝統的な衣装や観光地、美しいマラヤ大学など、画面を通じて楽しむことができた。プログラムを通じてマレーシア人のバディと出会い、プログラム開始前から LINE で英語のやり取りをしていた。彼女は私の文法的に間違っただけの表現を気にすることなく、私を励まし続けてくれた。彼女との交流によって同じ趣味がたくさんあることがわかり、今度一緒にコンピューターゲームをする約束をした。

また、授業後には皆でゲームなどをして、とても賑やかな雰囲気の時間を過ごした。皆、ゲームに熱中し、距離が縮まった。最も印象に残っていることは、人狼ゲームを一緒にやったことだ。人狼ゲームは以前にもしたことがあったが、使った言語は中国語であった。このゲームを英語でするのは初めてで、とても難しかったが、その過程がとても面白かった。みんなは積極的に人狼を推測したり、様々な理由をつけて自分は狼ではないと説明したりした。さらに、日本料理やマレーシア料理もシェアした。中国人留学生として、日本にいるため中国の伝統的な食べ物を実際に準備することができないことは少し残念であった。また、オンラインだったので、マレーシアの食べ物を味わうことができなかった。今後、マレーシアに旅行する機会があれば、ぜひ、それらの食べ物を食べてみたい。

このプロジェクトを通じて、多くの成果を得ることができた。まず、英語を話す時に自信が持てるようになった。プログラムに参加する前は、英語で人とコミュニケーションをとる機会がほとんどなかったため、英語の文献を読むことはできても、スピーキング力はとても低かった。このプログラムでは、授業中も授業外も、英語でコミュニケーションをとる機会が多くあった。研修後、まだ文法的な間違いはあるものの、緊張することはなくなった。また、論文を書けるようになったことも成果である。これまで英語で論文を書くということに触れたことがなかったが、Writing and Composition の授業で論説文の構成や段落の内容を学んだ。さらに、Malaysian Studies の授業では、マレーシアの歴史、食べ物、服装、伝統的な風習などを学んだ。将来、マレーシアを訪れ、その文化を自分の目で確かめたい。

オンライン留学で得た気づき

工学部 2年 石川朋佳

マラヤ大学のオンライン留学を通して特に成長したと感じる点である、リスニング力と異文化理解力について記述する。

まず、一点目のリスニング力についてである。私はオンライン留学に参加する前か DMM 英会話をしていた。そこで感じていた自分の課題というのは、第一に聞きとれないと答えることができないということだ。会話というものは相互の意思疎通ができて初めて成り立つものだから、リスニングができないといくら自分のことを伝えることができたとしてもそれはスピーチであって会話ではない。つまり私はただのスピーカーだった。オンライン留学を終えていえること、それは、会話ができるようになったということである。相手の話を聞

いて、疑問を持ち、質問する。相手の話を聞き、共感し、伝える。以前できなかった会話が当たり前になるようになっていた。受動的な英語学習から積極的な英語学習に変わったのだ。今までの自分は英語を単に享受していた。黙っていても「先生」が質問してくれる。話せば褒めてくれる。しかし、オンライン留学では自分から英語を提供していかないとならなかった。相手は私と同じ学生だ。友達と会話するのに一方的に話すだけ、聞くだけが許されるだろうか。もちろん、楽しいのはこのオンライン留学で行われたような双方向の英語学習であった。会話ができること、みんなと共感すること、笑い合うことは、最高に楽しかった。

次に、二点目の異文化理解力についてである。日本は島国、ということも理由にあるのだろうか、日本に住んでいない人に対して、外国人という印象を強く抱くと思う。私もそうだった。外国の人は、文化も違うし、言語も違う、そして住んできた場所も違う。逆に何が日本人と同じなのだろう。様々な新しい世界を知ることができるから、外国人と話すのは好きだ。でも同時にどこか心の中で異文化を「理解しよう」としている自分や、違いを「受け入れよう」としている自分がいた。すべてをわかり合えるものはないと思っていたのだと思う。今回、マラヤ大学の学生とたくさん話をする機会があった。そこでは「理解しよう」と努力する必要のないことがたくさんあった。全く私と同じだったからだ。各国の紹介や食べ物の紹介、伝統衣装を紹介しているときにチャットを使って自由に感想を書いていた時も、使用言語が英語であるだけで、内容に関しては日本の友達と話していることとそんなに変わりはない。言語の違いによる壁はない。全くの別物と思っていた私にとってこの気づきには驚きもありつつ、嬉しさがあった。一方でマレーシアの授業で文化の違いも目の当たりにした。しかしとても楽しかった。同じ感想を持って共感あっていた友達が、私の知らない文化を当たり前としている世界で生活しているということ。それに気づき、もっと知りたい！と思った。異文化理解力は理解しようと務めるのではなく、文化の違いを楽しむことなのかな、今はそう思う。

以上のように、私は今回オンライン留学を経験して、積極的に英語学習に向き合う姿勢を得て異文化理解に対する考察を深めることができた。

プログラムを通して身についたこと

農学部1年 鹿股とほこ

今回のプログラムを通して身についたことについて、言語運用能力、異文化交流、行動力の3つの観点から考察する。

まず言語運用能力については、英語のリスニング力とスピーキング力の向上が挙げられる。このプログラムでは、授業やアクティビティなどを含め、1日4時間から8時間程英語

だけを聞き、英語だけを話した。そのため、これまでの生活にない新たな刺激が加わり、最初は違和感があったが、初日の夜に英語で話している夢を見るほどに変化していた。また、これまで海外に行ったこともなく、英語でしかコミュニケーションが取れない環境にいたこともないので、初めて必要に迫られて英語を話す機会だった。そのため、これまで以上に何かを話さなければという気持ちが大きく、言葉を発することができた。

次に異文化交流については、これまで考えていたことが、偏見だったことに気づいたこと、様々なことに配慮して異なる文化の人と関わらなければいけないと知ったことが挙げられる。まず、私の持っていた偏見として、日本とマレーシアでは、持っているものや生活環境が全く違うと考えていた。しかし、私が持っている日焼け止めとマレーシアの学生が持っている日焼け止めが同じであったり、マレーシアの学生が日本の文化に親しみを持っていて恋バナにも積極的に参加していたりする姿に日本の学生と変わらない一面を見た。しかしその一方で、日本ではあまり考えて生活しない食べ物についてのタブーや、マナーなど、異文化の人と交流する上で大切なことにも気づかされた。

最後に行動力については、これまでに挑戦したことのないことにチャレンジしたことが挙げられる。例えば、これまで学内で英語を用いて留学生と交流する機会があったが、勇気がなかった私は、先輩にしたい質問を日本語で話し、その先輩から留学生に英語で伝えてもらうということしかできなかった。しかし今なら、英語で話すことにこれまでよりためらいがなくなっており、簡単な言葉なら文法がおかしくてもなんとか伝えられるように努力できるだろう。

このプログラムを通して、これまでにない視点を発見し、さらに視野を広げたいと思うきっかけにもなった。これからもこの経験を生かして行動していきたいと思う。

プログラムを通して得た発見と成果

医学部保健学科 2年 今井佑理花

3週間のオンライン留学プログラムでは、英語4技能向上のための授業や異文化理解のための授業・授業外活動が行われ、それら全体を通して多くのことを学び成長することができた。ここでは、私の英語運用能力の向上と英語と向き合う姿勢の変化の2点について詳しく述べる。

まず英語運用能力の向上についてである。「語彙力の向上」という点では、ひとつの単語の類義語や対義語を集め、それらを覚えて語彙を増加させるという学習法の有用性に気付かされた。今までは、日本語を英語に翻訳するにはどの単語を使ったら良いか、ということばかり考えて単語を勉強していた。しかし類義語や対義語を共に学ぶことで、微妙なニュアンスの違いを表現できたり、より高度な文章を書くことができたりする。私は実際に、授業を受けて類義語を多く覚えることができ、非常に良い機会となった。

「スピーキング力の向上」の点では、Speaking and Pronunciation の授業を通して大きな変化を得た。スピーキングは 4 技能の中で私が最も不得意に感じていたものであり、普段自分で勉強するのも難しい項目である。相手からの質問の内容を聞き取って理解し、瞬時に自分の意見をまとめて使うべき単語や文法を考え、そして発言する、というこの一連の流れが私にとって非常に大変だと感じていたからだ。私は自分もっている知識や、英単語・英文法に自信はなかった。この留学プログラムが開始して 1 週目は、授業や授業時間外活動で自分から発言するなどできなかった。先生やバディの学生から質問をもらっても、非常に短い文で返してしまったり、無言になってしまったりして、より自信がなくなってしまった。しかしそれと同時に、積極的に発言するマラヤ大学の学生や、それに応えようと粘る日本の学生の姿をみて刺激を受けた。多少の間違いを気にせず、思い浮かんだ簡単な単語でも良いから、自分の意見を表現しようと発言することの大切さに気づいた。プログラム後半の授業では、自分からグループ活動で発言することが少し増えた。また、英語を話すことの怖さがかなり少なくなった。これは私にとって大きな進歩であり、スピーキングという項目における成長であった。

次に英語と向き合う姿勢の変化について述べたい。私はこれまで、まずインプット学習を行い、その後アウトプットするという方針で英語学習を行っていた。そのため、使用することのなさそうな単語は覚えなかったり、スピーキングの練習がどんどん後回しになっていたりしていた。しかし、このプログラムでは全て英語で実践的な授業を受け、アウトプットを行い、そして足りない単語や文法をインプットして補強していくというサイクルが非常に重要であると気付いた。たくさん英語で会話するためには、身の回りに存在するトピックを日頃から集めることも必要である。さらに、英語力の向上には英語を用いて意思疎通することの楽しさをもつことも大事な要素である。この気付きは、今後の私の英語学習に大きな影響を与えるだろう。

以上のように、英語の学び方や学ぶ姿勢に関して、多くのことを学んだ。これからも、プログラムを通して得た少しの自信と大きな向上心をもって英語学習に励みたい。

プログラムに参加して得たもの

医学部保健学科 2 年 堀内華乃

私は、「英語力の向上」「他国の人とコミュニケーションを取る機会を得ること」という 2 点を主な目的に、このプログラムに参加することを決めた。ここでは、2 点の目的に対する成果を述べる。

英語力の向上に関しては、特にリスニングの力が向上した。参加する前は、英語に強い苦手意識があり、1 週目は授業の内容も聞き取れないことが多く、アクティビティではゲームの内容が理解できず、ルール説明に時間をかけてしまったこともあった。しかし、授業やア

クティビティを重ねていく度に聞き取れることも多くなり、授業内容の理解も深まっていた。実際、EFSET という無料の英語力測定テストでは、プログラム終了後、リスニングの点数が上がった。

このプログラムを通して、英語力の向上には、英語を使わなければならない環境が必要だと感じた。リスニングの力を向上させるには毎日少しずつでも行うことが重要である。このプログラムに参加することで3週間、英語を聞くという機会を得ることができた。また、リスニングに限った話ではなく、バディとの連絡や授業で英語を使う機会を一気に増やすことができた。プログラムに参加していた期間、日本語より英語を使う時間の方が長かったのではないかとさえ感じる。プログラム終了後も、「英語でどう伝えよう」と考える癖がついた。さらに、自分の英語力の低さを痛感し、これからも英語を勉強し続けようというモチベーションにも繋がった。3週間で得たものは3週間で完結せず、これからの生活にも影響するものであった。英語を英語で学習するこのプログラムは英語力の向上に最適であると思う。

また、このプログラムに参加し、他国の人とコミュニケーションを取る機会を得ることができた。授業やアクティビティの時間はもちろん、それ以外の時間でも LINE や Instagram を通してコミュニケーションを取ることができた。私は、2022 年春に実施された別の大学のオンライン留学プログラムに参加した経験がある。そのときは、授業やアクティビティで会話をする機会があったが、プログラム終了後に関わりが途絶えてしまい、あまり仲良くなることはできなかった。しかし、今回はマラヤ大学の学生も常に明るい雰囲気積極的にコミュニケーションをとってくれて、仲良くなることができたと感じている。このプログラムを通して、新たな交友関係を作ることができた点においても、参加した意味があったと強く思う。さらに、コミュニケーションを取る中で、異なる国で生まれ育っても同じことを考えていることや、反対に同じ日本人でも自分とは異なることを考えているということを改めて実感することができた。他の国の人も同じようなことを思っているのだということに気づかされ、海外で働きたいと思っている私にとって、海外に行くハードルも低くなるととても良い機会だった。

以上のように、今回のオンライン留学は、自身の英語力の向上に繋がり、日本の他大学生、マラヤ大学の学生とのコミュニケーションの機会を得ることができた。